

推薦レポート

田邊和子先生推薦

近松の遊女像

『曾根崎心中』のお初を例として

姚 瑾 儀

はじめに

近松の作品において、遊女を主人公とする場合は多い。『曾根崎心中』のお初だけでなく、『心中天の網島』の小春、『女殺油地獄』の小菊、『冥途の飛脚』の梅川等、すべては遊女として登場した人物である。

『曾根崎心中』と言える近松の代表作の主人公のお初を例として、近松の作品における遊女像を考えていきたい。

『曾根崎心中』の成立と梗概

元禄十六年、大阪竹本座初演の『曾根崎心中』は、近松世話物浄瑠璃の起点として、極めて重要な位置を占めている。ただでさえ社会現象としてあった心中死の流行に拍車をかけ、三年越しのヒット作として竹本座の経済状態を劇的に改善した。最初の世話物浄瑠璃でなかったとはいえ、近松門左衛門の一連の世話物浄瑠璃の起点となり、他にも大きな影響を与えて、重要な作品であることは間違いない。

『曾根崎心中』という作品は、上中下の三巻で構成され、曾根崎で実際に起こった心中事件をもとに作られた近松門左衛門の代表作である。愛情や名譽を大切にすることからこそ世の中と対立するという、若者の純粹さゆえの悲劇を描く作品である。内容は以下に概観する。

曾根崎に、叔父が経営する醤油屋に勤める徳兵衛と天満屋の遊女のお初は恋し合う仲であり、将来結婚しようと誓い合っていた。しかし、徳兵衛の叔父は徳兵衛と自身の姪の結婚を企てるため、徳兵衛にその縁談の話を拒否されたが、徳兵衛の継母に結納金を渡した。お初との結婚を決意した徳兵衛は継母の家に行き、叔父から受け取った大金を返すために、金を貸してほしいと懇願された。そして、どうしても金が要る九平次に三日限りの約束で、お金を貸してしまった。三日の期限が過ぎて、お初にも身請け話が持ち上がった。徳兵衛は九平次に返済を迫ったが、九平次は逆に借金の事実を否認し、徳兵衛を公衆の面前で詐欺師呼ばわりしたうえ散々に殴りつけ、面目を失わせる。

一連の出来事により、徳兵衛は信用を失い、お初の身請けにも希望が持てなくなってしまった。自分の無実を証明する、または愛を守るために二人は死を決めた。結局、曾根崎の森で夜明けを迎える時、二人は心中を果たしたのであった。

近松の遊女像

近松門左衛門の作品の中には多くの女性たちが登場し、遊女を主人公にしたものも数多くある。『曾根崎心中』において、女性主人公のお初も天満屋の遊女である。廣瀬は一般的に遊女が「奢侈、放蕩の根元であり、婦徳論の求める貞女の対極にある」と指摘した。このように、一般的に遊女とは「婦徳論の求める貞女の対極にある」存在であるが、『曾根崎心中』で近松は身売りする純情な女性としての遊女像が創り出された。当時、一般の女性は地女と呼ばれ、近世には恋の対象としなかったのである。一方、遊女は恋の対象とみなされるのは尋常であった。そして、本質的に身を売る遊女を理想化する傾向があった。

遊女としての主人公を理想的で純情的な女性を想像させるために、遊女としての特徴を否定されるのである。冒頭部分の「観音めぐり」での描写から窺える。

罪も夏の雲あつくろしとて、駕籠をはや。下際の戀目三六の。
十八九なる貌佳花。今咲き出しの。初花に、笠は着ずとも。召さずとも。照日の神も男神。よけて、日負けはよもあらじ。

お初がどのような状況で三十三所をめぐるっているか、ここまでまだ明かされていない。したがって、「観音めぐり」の段階では、お初の恋は

一般の女の恋として理解される可能性が残されている。身分等の外的な条件は一切描かれず、お初の内なる想いの深さだけが描かれるのである。また、その後お初の一人称的表現が現れるセリフ、

人の願ひも我がごとく、誰をか恋の祈りぞと。あだの恪気や法界寺。

という所では、お初が他の女が祈っている姿を見て自身に引きつけ、いったい誰を恋して祈るのかと嫉妬している姿が描かれる。お初が遊女であることを踏まえていえば、恋は遊廓にしかなく、それゆえに遊廓外での本当の恋の成就を夢見ているのだろう。

「近松は遊女まで理想的な女性として形象した」と鳥居は指摘し、その「理想的な女性」ある程度婦徳論による貞女、むしろ一般の女性を意味する。

遊女は嘘の恋を本当の恋らしく売り、男客は本当の恋だと思つてそれを買う。または本当の恋らしくそれを買う。しかし、売ることができるのはゲームとしての恋、技術としての恋、即ち嘘の恋である。本当らしさの中には最後まで嘘が残る。遊女としてのお初が本当の恋を求めてしまふのは、嘘の恋の中にも含まれる、恋の本質が首をもたげてるからである。本当の恋を通じてのみ、遊女は一般の女性としての尊厳を獲得できたのだろう。

したがって、お初が、他人の女、或いは一般の女性と同じように、本当の恋を祈り始めるときから、遊女でありながら遊女の身分を逸脱し、より高位の、本当の恋の主体となった。

また、家父長制によって女性に「貞」と「忠」を求めるのは一般的であり、理想的な女性像に対する不可欠な要素である。遊女の場合に、そ

の表現は男性主人公への一途な恋である。『曾根崎心中』の場合も、お初は一時的に身請けが出来ず、身体の貞淑を実現できなくても、精神的な「貞」を強調する。

もう一つ注目に値するのは、『曾根崎心中』で近松は遊廓の恋のエロス要素を意識的に無視しながら、感情的な要素を抽出し表現することである。

お初と徳兵衛は本来遊女と客の関係であったが、二人とも意中の人に出会ったと思い、本気で付き合うようになった。お互いに厚い情愛を注ぎ、結婚を切望していた。多くの場合に、遊廓の恋を扱う作品は恋と性交渉は不可分である。しかし、お初と徳兵衛の場合、遊廓の恋にも関わらず、一般の恋の進行は未婚男女のあいだのそれとさほど違わない。ここには近松が遊廓のエロス要素を否定し、なるべくそれを清純な恋にしようとする意図が感じられる。

加藤は近松と同時代の西鶴の哲学を「徹底した快楽主義であって、性的快楽の追求に、仏道も、儒教道徳も、全く考慮しない」と評する。西鶴の「道徳と儒教の無視」に対して、筆者は近松の作品では道徳が高い位置にあると考える。

鳥居は、近松作品で登場した女性の「純情」という特徴について、以下のように述べている。

妙の筆によって描き出されたものであったが、その淵源は古浄瑠璃に登場して親しまれた可憐な乙女達に求めることが出来るように思う。「海躍瑠璃物語」の浄瑠璃姫、「阿弥陀の胸割」の天寿姫、「牛王の姫」の牛王の姫、「さんせう太夫」の安寿等々、純情な乙女達が献身の美しさを感じ。動的に見せていたのである。「曾根崎心中」

のお初のみならず、その殉愛の姿の輝かしさは、これらの古海躍瑠璃の乙女達の元祿的再生とすることができると思う。⁽⁴⁾

このように、近松は古浄瑠璃の女性の献身的、純情的な要素を抽出し、遊廓や遊女も繁昌であった元祿時代の要素を加えて、お初という人物が作られた。

遊女と貞女は一見正反対のように見えるが、『曾根崎心中』のなかで、お初に融合されてきた。遊女としての身分、純情な内面、両者の矛盾はさらに文学作品で魅力を醸し出した。この場合、女性主人公が遊女ではあるが、男女のあいだを結びつけるのは深い情であり、遊廓の性的売買関係は当事者の心理において不問に付されている。

遊女と心中

ここで、遊女と心中の関係を考える。

『曾根崎心中』や『心中天網島』などの作品は現実に起こった心中事件を素材としても、心中物語の女性主人公を遊女とする場合が多い。佐伯が指摘したように、近世心中物語における花柳界の女性は心中する傾向がある。⁽⁵⁾

『曾根崎心中』において、お初と徳兵衛は相思相愛が成就出来ない結果として心中したが、お初の遊女としての立場から見れば、単純に相手の恋ゆえに死というわけではない。

金銭で身を売り、自由にならない遊女は、死でしか恋が叶わないのである。その「恋」はお初の自主的な意識であり、それを捨てないかぎり、死は避けられない。心中という行為は、遊女にとって一連の厳格な社会的規範から解放されて自由になることを象徴していると言われるで

あろう。なお、近松が公的な論理に対する個人的な世界（すなわち「義理」と「人情」）を、社会的繊弱である女性に託して表現しようとした時、その意味の女として極限的な存在として捕捉されたのが遊女であった。一般の女性より弱い立場に置かれていて、当時社会的に疎外された存在であった遊女は恰好の素材となる。

おわりに

以上、『曾根崎心中』の女性主人公のお初を例とし、近松の遊女像の構築について考察を試みた。

近松だけでなく、江戸時代に遊女を扱う文学作品は数多くある。その最大の原因はやはり江戸時代の遊廓の発達とその特殊な性格によるものである。江戸時代では商業の発達と都市文化の繁栄により、遊女は一種の職業として定着し、遊廓も繁盛してきた。

遊廓は、封建社会において、男性によって男性のために作られた空間であり、遊廓や遊女に触れている作品を描く際に、劇作家も男性であるという、遊廓についての言説は常に男性支配によって存在していた。そして、遊廓の恋を扱う物語の特徴は、一言でいえば男性中心の女性讃美である。すなわち男性優先を大前提としながらも、遊女たちの可憐な恋の情を通して、彼女らの純情を表現し、その無垢な感情を礼讃する。

近松の作品において、とくに理想的な女性像の構築には相似点が少ない。複数の作品での遊女、または女性人物たちを系統的に分析しながら、共通する特徴を考察する必要があると思ひ、今後の課題としたい。

原文引用

『近松浄瑠璃集 上』岩波書店、1958

引用文献

- (1) 廣瀬千紗子(2012)、「廓の言葉——十七世紀上方の色道手引き」、『とばの力——あらたな文明を求めて』横山俊夫編著、京都大学学術出版会
- (2) 鳥居フミ子(1983)、『近松の女性』、『日本文学』59
- (3) 加藤周一(1980)、『日本文学史序説・下』平凡社
- (4) 鳥居フミ子(1983)、『近松の女性』、『日本文学』59
- (5) 佐伯順子(2008)、『愛』と『性』の文化史』角川学芸出版

参考文献

- 上野千鶴子(1984)『性愛論』河出書房新社
加藤周一(1980)『日本文学史序説・下』平凡社
佐伯順子(1987)『遊女の文化史』中央公論社
佐伯順子(2008)『愛』と『性』の文化史』角川学芸出版
鳥居フミ子(1983)『近松門左衛門曾根崎心中の（お初）愛に殉ずる女』『国文学解釈と教材の研究』27
鳥居フミ子(1983)『近松の女性』、『日本文学』59